

## テーマ：「子どもたちの未来のために」(3/26, 29 放送分)

ナレーション 今回は、「子どもたちの未来のために」をテーマに、尼崎市の平成27年度重点取組のうち、「教育」そして「読書」について、稲村市長とゲストの皆さんがお送りします。本日もお届けするのは、その後半部分です。それでは、どうぞお楽しみください。

市長 「読書」がキーワードの重点取組ですが、実は、小学校の6年生と中学3年生を対象とした「全国学力・学習状況調査」の結果を見ますと、「読書が好き」、「読書時間が長い」、そして「学校や地域の図書館に行く頻度が多い」という児童や生徒ほど、色々な教科の正解率、正当率が高い傾向にある、ということなんです。

では牧野さん、ちょっとお話を伺いたいのですが、やっぱり、子どもたちに読書習慣をつけるということが、こういった学力の面でも重要な要素であると思うのですが、どうでしょう。

牧野 そうですね。小さいころからたくさんの本に出会うことができれば、読書を「学ぶ」ではなく「楽しむ」から入っていきまし、楽しいから読む」という行為が、自然と読解力や集中力、「知りたい」と思う探究心などを起こさせるのではないかと思います。

中央図書館に来る子ども達も、まず「楽しいから読む」から始まっています。読み聞かせなどをしていると、1歳や2歳の子が、声を出して笑ってくれることもありますし、小学生が、自分の気に入っている本を、友達に薦めたりしている姿もよく見かけます。

稲村 なるほど。もちろん、本を読めば必ずテストの点が上がるという単純な話ではないのですが、普通に考えても、こういう「読書が好き子ども達」というのは、色々なことに興味がある子だと思っんです。好奇心旺盛な子なんじゃないかなと思っんです。そういったことがやっぱり、国語はもちろんのこと、色々な教科への学びの意欲とか、学習態度とかにつながっているんじゃないかなと思っっています。

そこで尼崎市でも、そういった子ども達の基礎になる部分をもっと応援していきたいということで、新年度から「読書力向上事業」という事業を、新たにスタートさせようと予定しています。

これは、学校の各教科の学習とも連動させながら、もっと学校の図書室を活かしていきたい、さらに、読書力の向上に取組んでいきたいということで、学校図書室の管理運営業務を手伝っていただく司書さんなどを、すべての小学校に配置していく。また、中学校でも、地域のボランティアの皆さんにご協力いただいて、子ども達の読書習慣をもっともっと育成していこうという取組なんです。

牧野 はい。学校図書室を利用する子どもが増えれば、本に興味を持ち、図書館にも足を運んでくれる子が多くなるのではないかと期待しています。

忙しいお父さんやお母さんが、子どもたちのため、平日でも本が借りられるように、4月から子どもの本の部屋の開いている時間が、夜の8時までになります。そして、貸出冊数の上限が5冊増えて、15冊までとなります。

稲村 それはいい取組ですよ。こういう学校の図書室の充実と、市内の通常の図書館の利便性や充実が、お互い相乗効果になっていくといいなと思います。

牧野さん、平井さん、そして山下さん、4月からもよろしくお願いたします。

さて、図書館はやっぱり何と言っても、いい本、新しい本などを常にたくさん揃えられれば一番いいんですけども、そのなかでも蔵書の充実については、今までご苦勞をいただいていたんじゃないかと思っています。

そこで新年度から、これも新たに「ブックオーナーズ制度」というのをスタートしたいと思っています。

実はこの制度、市民の皆さんから1口1万円、絵本にしますと大体6冊から7冊の寄付を募って、児童図書を増やしていこうという取組なんです。企業や団体、個人の方々の広くご協力をいただいて、子ども達にたくさんの本を手にとってもらいたいと思っています。

平井 はい。企業ということでは、昨年、杭瀬にある木村化工機株式会社様から、尼崎の子どものためにと、たくさんの絵本等を寄贈いただきました。

「ゆめさき文庫」と名付けたこの文庫には、1,000万円分の絵本などの寄贈をいただき、中央・北図書館で、それぞれ毎月およそ200冊を新たに受け入れています。

稲村 そうなんですよ。実は、私もこの木村化工機の社長さんには、直接お礼を市長室で申し上げたのですが、この「ゆめさき文庫」をきっかけに、もっともっとこういうのを広げていきたいと、「ブックオーナーズ制度」につながったというわけなんです。

平井さん、この「ゆめさき文庫」、子ども達の反応どうですか？

平井 はい、とても喜んでもらっています。今人気の「サバイバル」シリーズや、長く親しまれてきた「アンパンマン」や「ぐりとぐら」、「ノンタン」など、子どもに好まれるたくさんの本が本棚に並ぶので、みんな嬉しそうに借りていってくれています。

また、新しいコーナーとして設置していることで、子どもたちだけでなく、保護者の方々にも注目していただいているようで、親子そろって本を選んでいる様子も見られます。

稲村 そうですか。やっぱり親子そろって楽しんで下さっているのは、本当に嬉しいことだと思います。

また、中学生の読書力向上にご協力いただく地域ボランティアの皆さまや、このような市内企業の皆さまのお力添えを、本当に心強く思っています。まさに地域が一丸となって、子ども達の学力向上に取り組んでいる、そして、それが私たち自身の「学び」にもつながっていくと素敵だなと思っています。

ところでゲストの皆さんも、きっと本がお好きで、今の職場にいらっしゃると想像するのですが、これまでに読んだ本のうち「忘れられない一冊」はありますか？

牧野 はい。私は子どもの頃に読んだ「オズのまほう使い」です。ドロシーと弱虫らいおん達が繰り広げる物語にワクワクした思い出があります。

平井 私は小学生の頃、夏休みに読んだ富安陽子さんの「キツネ山の夏休み」が心に残っています。

主人公の男の子の夏休みの体験に心躍り、一度読んでからは、毎年のように夏になると読み返していました。

山下 私の一冊は、小学校高学年の頃に読んだ「海底2万マイル」という冒険小説です。目に見えない海底に広がる世界を想像して、ワクワクしたことを思い出します。大人になって読み返すと、実は150年近く前に書かれた本ということにも、驚いています。

稲村 そうですか。今日は3人の皆さん、「お子さん向けにお薦めの本」というのを少し念頭に置

いて、「忘れられない一冊」をご紹介いただいたのかなと思うんですけども、最近「ビブリオバトル」という、自分のお薦めの本をプレゼンテーションするというイベントも、ずいぶん色々な所で流行ってしまっていて、実は市役所でも、有志でやっているんですよ。こういうはやはり、すごくいいですね。また、私たちのコミュニケーションや、「あ、この人こんな本読んだ」というような新しい発見ができます。やはり「読書」って豊かなことだな、素敵だなと、つくづく感じています。

私は、実は母親になって10年。娘も10歳になったんですけども、やっぱり、子どもが生まれて、たくさん絵本を読むようになりました。たくさんいい絵本があるんですが、大人向けの絵本というか「小さなあなたへ」という、母になった人の目線で娘の成長を追っかけていくということを、簡単に絵本にしてる本なんですけれども、ちょうど子どもが保育所に行き始めてまだ間もない頃だったと思うんですが、もう号泣してしまって。私その後どうしたかと言うと、その絵本をもう一冊買って、自分の母親にプレゼントしました。やっぱり自分も、自分の母に、今だからわかる感謝、伝えたい気持ちというのが湧いてきて。そういうのを媒介してくれる本です。これは親の皆さんにお薦めでございます。

さて、また「図書館」に話を戻してみたいと思うんですけども、最後に、この放送を聴いて、「図書館に行ったことないけど行ってみよう」と思ってくださいの方がいらっしゃるかもしれません。そんな方々へのメッセージがあったら、皆さん、お願いできますでしょうか。

牧野 はい。まず、本を借りていただくには、貸出券が必要です。貸出券は、中央・北の両図書館、6地区公民館、中央地区会館、園田地区会館でお作りいたしますので、市内在住の方は、住所確認に必要となる運転免許証・保険証・学生証を、在勤・在学の方は、社員証・学生証など、在勤・在学が確認できるものをあわせてご持参のうえ、お申し込みください。皆さんのご利用、お待ちしております。

稲村 はい。それでは今日は、ゲストの皆さん、ほんとにありがとうございました。

3人 ありがとうございました。

稲村 このほか、尼崎市では「教育振興基金」を新たに設置することとしています。

これは、今年度の補正予算で計上しているものですが、これから、この基金に色々な寄付を募りながら、多くの方々に「参加型」で、子ども達の教育を支えていただければと思っています。

未来を担う子ども達の「学び」、「育ち」を支えるには、市民の皆さんや、事業者の皆さんのご協力のもと、地域が一体となって取組んでいく必要があります。

尼崎にかかわるすべての人の笑顔があふれるまちを目指して、新年度も引き続き、全力で取組んでまいります。皆さまのご協力を、よろしく願いいたします。

それでは、今日はこの辺でお別れです。次回の放送もお楽しみに。

以上